

田中允編

未刊謡曲集

五

古典文庫

田中允編

未刊謡曲集

古典文庫

古典文庫第二二一冊 ©

昭和四十年十二月十日 印刷発行

(非売品)

編者 田中 允

集曲謡未刊

五 発行者 吉田 幸一

東京都板橋区熊野町三四

印刷者 帝都印刷製本株式会社

発行所

東京都(王子局区内)
北区西ヶ原町三ノ三四

古典文庫

電(九一九)二七一七
振替口座東京一四五九七番

目次

凡例	五
各曲解題	七
伝本略号解説	三五
本文	
京妻	(七) 二七
漁翁癡心(網持)	(七) 三三
金玉羽衣	(八) 三七
弘計億計(弘計・二帝・二帝出世・須磨の市人?)	(八) 四〇
鯨	(九) 四五
九品浄土	(九) 五〇

黑谷詣 (名香?)	(5)	 訓
黑主	(10)	 訓
現在頼政	(10)	 訓
恋草	(11)	 訓
高野之巻 (高野?)	(11)	 訓
小鍛冶之前	(11)	 訓
小式部	(11)	 訓
小尉 (住吉の小尉)	(11)	 訓
虎石	(12)	 訓
欣求浄土 (九品)	(12)	 訓
根元竜田	(12)	 訓
金毘羅 (象頭山)	(12)	 訓
西国下	(12)	 訓
西国廻	(12)	 訓

鷺之前 (鷺の口).....	(1K).....	1011
桜之池	(1K).....	1014
桜之前	(1中).....	101K
蜜語橋	(1中).....	1114
佐 知	(1中).....	1114
佐 和 (熊).....	(1中).....	1111
三人孝	(1〇).....	1114
鳴立沢 (新鳴立沢).....	(1〇).....	111K
時雨物狂 (神崎時雨).....	(1中).....	1114
七十二候 (鶯).....	(1中).....	1114
篠田森	(110).....	1110
忍 摺 (文字摺).....	(110).....	1114
篠村願書 (篠村・願書).....	(110).....	111K
紫陽山	(111).....	1113

諸葛 (諸葛孔明・諸葛亮)	(三)	一六
白河	(三)	一六
真如堂	(三)	一〇
推古桜	(三)	一六
周防内侍	(三)	一五
須摩寺	(三)	一五
住吉物狂 (花園少将)	(三)	一〇
石竹	(三)	一〇
桑露杉	(四)	一一
追記 (第一・三・四冊の分)		一六

凡

例

- 1、吉田本未刊曲（五十音順）中、「京妻」から「桑露杉」まで四十三番を収めた。
- 1、翻刻はすべて原本通りにし、私意を加えたところは、皆（ ）でくくった。
- 1、原本には段落はないが、編者の見識で適宜改行した。
- 1、異本との校合は特に注意すべき所だけに絞った。
- 1、節付は印刷の都合上省略した。
- 1、次第・クセなどの重要補助記号は出来るだけ残したが、打切を意味する「ウ」間拍子を意味する「ヤ」「ヤヲハ」地拍子を意味する「トル」「片地」「ヲクリ」吟を意味する「ツヨ」「ヨハ」「和」などの特殊記号は省略した。
- 1、傍訓や清音を意味する「ス」などは必要と思われるもののみを残した。
- 1、「印は必ずしも原本通りにせず、詞の所（節付のない所）は「、節の所（節付のある所）は、を付けて区別した。（原本は「のみで、はない。また原本

に「のない所にも編者の見識で「またはべを附した)

- 一、句読点は原則として原本通りにしたが、八拍子一節の中間にある句読は節付の記号に過ぎないので省略した。また拍子に合う所では八拍子一節の句切の所、拍子に合わない韻文の所(節付のある所)では七五調を基調とする句切の所(以上は前後の節の関係上謡本に句読点を付けないのである)は、それぞれ一字分空白にした。
- 一、濁点は原本にはない場合が多く、これはすべて補ったが、原本にある場合もあり、異本を参考にして補った場合もある。また清濁いずれか不明の場合はそのままにした所が稀にある。
- 一、曲名の下に数字は吉田本の巻序を示した。(九18は九百番目の第十八冊の意)

各曲解題

京妻（きやうづま）〔井 13・国 4・斎〕 鴻山文庫本「番外謡七十一番（仮題）」に本曲のクリ・サシ・クセが京妻として見える。恋妻（謡曲叢書・新謡曲百番等所収。別名：浜田・恋草・思妻）も井上本第三種所収浜田には京妻を別名としているが、普通京妻といえは本曲を指すと見てよい。したがって貞享四年版能訓蒙図彙以下諸名寄所見の京妻は本曲であろう。

漁翁発心（ぎよをうはっしん）別名：網持〔石（謡曲界大正十五年六月号・観世昭和十六年四月号に翻刻）・斎〕吉田本以外はすべて網持とあり、これが本名らしく、名寄類はすべて網持を採用し、能本作者註文には作者不分明能の部に見え、いろは作者註文には「観小注之分（観世小次郎註文所見の分、即ち観世小次郎信光の註した名寄には見えるが作者は不明の意であろう）」とあるが、歌謡作者考は皆作者を「観世小次郎」と註している。したがって、歌謡作者考は「観世小次郎註文之分」と原拠にあったのを観世小次郎作と誤った結果かと思われるが、信光作の

疑いがないわけでもなく、吉田本のキリの前の「草の 陰なる白露と」の節附は、信光のとりわけ好んだヤヲハのトリと呑み節とを使った節で、信光作の紅葉狩では四度も愛用している。もともと石田本では全然別の節付になっているので、これは信光作を支持する有力な根拠とはなり得ない。

金玉羽衣（きんぎょくはごころも）〔井 1・五・斎〕福王系名寄に散見するのみ。

弘計億計（くけおけ）別名：弘計（くけ）・二帝・二帝出世・須磨の市人？〔井 1・下・田〕上懸は弘計億計または弘計（吉田本目録及び外題）下懸は二帝（田安本外題）または二帝出世（田安・下村両本内題）が通名らしく、下村本内題には「弘計億計」に「クケヲケ」と傍訓している。斎藤香村氏の「番外稀曲解題（謡曲講座第二期所収）」の「市人」の項には「須磨市人は弘計億計の事を作るものにてこの曲とは全く別曲なり」とあるが、須磨の市人と本曲とが同曲であることを確認する資料はなく、下懸には上懸に見える「須磨の市人……」の文句はない。二帝出世が明治の松尾名寄に見えるのみで、弘計・弘計億計・二帝いずれも名寄に所見のないのは不審であるが、須磨の市人は貞享四年版能訓蒙図彙以下諸名寄に

見える。

鯨（くぢら）名寄にも見えない珍曲。元文四年七月七日遠江の福田の浦で捕獲された鯨の霊が現れるというローカルニュースに取材して居り、成立間もなく福王流のレパートリーに入れられ、吉田本に組み入れられた新曲らしく、九百番目の第十九冊目（終りから二冊目）という位置もうなずかれる。

九品浄土（くほんじやうど）名寄にも所見のない珍曲。九品（吉田本は啟求浄土）とは別曲。

黒谷詣（くろだにまうで）別名：名香（みやうがう）？〔井3・朝1・下・仙1・国3〕延宝四年歿の香道宗匠米川常伯の霊が現れる新曲。このサシ・クセは曲舞「名香」（貞享三年四月版当流外蘭曲以下諸蘭曲集所収）で、これは香道PRのための香名を並べた使用謡式の謡物である。本曲は完曲としての魅力に乏しく、この謡物に前後をつけて香道PRの完曲にしたらしく考えられる。黒谷詣としては明治の松尾名寄に見えるのみであり、名香としても福王系の名寄に散見するのみ。新曲としては諸本小異あり、吉田本は下懸系の下村・仙台本に近く、井上・朝日・

国学院本の上懸系は相互に近似している。

黒主（くろぬし）〔井3・樺・国4・斎〕現行曲志賀も黒主と別称し、古写本（伝信光目録本など）で黒主と題した志賀に時々お目にかゝる。またいろは作者註文、歌謡作者考では志賀を世阿弥作としているが、同系の能本作者註文では黒主を世阿弥作としているから、能本作者註文の黒主は志賀と見るべく、したがって、運歩色葉集に能名としてあげている黒主（大伴と註す）も、二水記永正十六年二月二十六日、言継卿記弘治二年二月十二日（「黒主きり」とあり）、同記永禄七年六月十四日（「黒主入端」とあり）の条に見える演能記録の黒主はいずれも志賀と考えられる。しかし江戸中期の名寄に散見する黒主は本曲を指すものもあるかと思われる。

現在頼政（げんざいよりまさ）〔石（謡曲界昭和六年十二月号に翻刻）〕名女川辰三郎伝書所収謡目録国附に一來法師を現在頼政と別称しているが、普通に現在頼政といえは本曲を指すから、貞享四年版能訓蒙図彙以下諸名寄所見の現在頼政は大むね本曲を指すと見てよからう。

恋草（こひぐさ）〔国5〕恋妻（思妻・浜田・京妻とも）の別名も恋草と言うが、恋草と題するのは元禄十一年版四百番外百番本のみで、他は恋妻か浜田が多い。したがって江戸中期の名寄に散見する恋草は本曲の場合が多いと思われる。伊達本にも恋草があるが、これは更に別曲で、伊達本独特の戯作である。

高野之巻（かうやのまき）別名：高野？〔井1（謡曲界昭和十七年七月号・国語国文学研究史大成「謡曲狂言」に翻刻）・朝1・国3・斎〕いろは作者註文以下諸名寄所見。観阿弥作曲の高野（申楽談儀に「かやう「高野」の古き謡」とあるから、完曲ではなく、高野が霊地であることを謡った謡物であろう）はサシ・下歌・上歌の謡物形式で、家蔵「小うたひ外」（謡曲界昭和十五年九月号・国語国文学研究史大成「謡曲狂言」に翻刻、「高野まき」と題す）・鴻山文庫本「曲海」（本曲に附載して本書に翻刻、「高野巻」と題す）・鴻山文庫本「両曲鈔」（「高野の巻」と題す）・鴻山文庫本「車屋本曲舞集」（車屋道断自筆、文禄四年写、「高野」と題す）上杉本「乱曲」（上杉本附載の乱曲集）などに写伝しているが、この謡物には、世阿弥の「五音上」に「高野 亡父曲」と題してあげている「聞きしに越えて」の詞章、「申

楽談儀」に「かやうの古き謡に『春秋を待つにかひなき別れかな』この『春』の『る』を入るべし」とある詞章、「閑吟集」に「田楽の歌」と註して「深山鳥の声までも、心あるかと(やう)物さびて、静なる靈地かな、げに静なる靈地かな」とある詞章のいずれもがそのまま見えるから、この謡物「高野の巻」(別名「高野」)は五音にいう観阿弥作曲(作詞も観阿弥であろう)の「高野」、申楽談儀にいう「高野の古き謡」そのものであると考えられる。しかし完曲高野の巻は、右の謡物をサシ・クセの形式に変え、しかも途中の文句を改変して居り、その結果、申楽談儀所見の詞章はカットされ、閑吟集所見の詞章も「心あるかや物さびて」が脱落している。完曲はその外にも別のサシ・クセを更に後に入れているが、この両者のサシ・クセを除けばつまらない曲で、能として上演の魅力はない。したがって完曲高野の巻は、観阿弥の謡物「高野」に基いて後人の作った曲(但しいろは作者註文成立八天正六年——文禄三年の間、以前の作)と考えてよいと思う。(謡物だけでは高野の巻とは呼び得ないから、謡物が高野の巻と題されたのは完曲成立以後と考えてよい) ↓参考文献「古き高野の謡」田中允(謡

曲界昭和十五年九月号)「古き高野の謡追記」田中允(謡曲界昭和十五年十月号)「高野の古き謡に就いて」小林静雄(同上)「高野の巻」田中允(謡曲界昭和十七年七月号)以上一括して国語国文学研究史大成「謡曲狂言」に再刻。

小鍛冶之前(こかぢのまへ)現行曲小鍛冶のワキツレに次第と道行とを加えたもので、他に伝本もなく、後人の作と思われる。

小式部(こしきぶ)〔江・井3・紺(和泉式部全集に翻刻)・鴻雄・元・国45〕仙台本の同名曲とは別曲。名寄類には元禄三年の江崎本謡名寄以下福王系の名寄に散見するが、仙台本小式部は他に伝本もなく、福王系でもないから、名寄類は本曲を指すと見てよい。「外には仁義礼智信……」の所は現行曲経政の影響と見てよく、室町後期か江戸初期の作であろう。

小尉(こじょう)別名…住吉の小尉〔元・石・能・江・井13・吉・田・島・仙1・下・上・五・国245〕国学院本第二種は「住吉小尉」と題し「小尉斗トモ」と註して居り、世阿弥の「九位」や番外曲「常陸帯」(能本作者註文系諸本や自家伝抄に世阿弥作)に見える「霞明らかに日落ちて、万山皆紅なり」の禪林の句が本

曲にも見えるから、自家伝抄に世阿弥作とあり、いろは作者註文にも曲名のみ見える住吉小尉は本曲を指すと思われる。小尉としては元禄三年の江崎本謡名寄以下主として福王系の名寄に散見し、元禄十三年版観世流外三百番小謳に本曲のシテ上歌が収められている。

虎石（こせき）〔元・鴻雛・石・朝1〕元文享本に「コセキ」と傍訓あり（古今謡曲解題）、吉田本本文にも「虎石」の「虎」に「コ」と傍訓があるから、「コセキ」と読むのが正しいと思われるが、貞享四年版能訓蒙図彙以下諸名寄の多くは国附を相模とし、「トラガイシ」と傍訓したり、「虎が石」と書いたりしたものが多い。これらはすべて「コセキ」を誤ったものと見ることも出来るが、また国附の相模を正しいとすれば、大磯の虎御前化石譚（柳田国男「妹の力」二三七頁参照）に取材した「虎が石」という別曲があるのかも知れない。

欣求浄土（こんぐじやうど）別名…九品〔朝1下・仙1〕吉田本以外はすべて九品とあり、鴻山文庫本「車屋本曲舞集」（車屋道断自筆、文禄四年写）鴻山文庫本「曲海」（「車や道断以本写之也」とあって、車屋本曲舞集と同文）所見の曲舞九品は本曲